

人文フォーラム

28

2008.3



CONTENTS

巻頭言

木と森と

人文学部長 追塩 千尋…… 1

第7回 カナダ・ブロック大学 研修旅行報告…… 2

第39回全道ロシア語弁論大会 …… 7

別れのあいさつ

詩への希望

野坂 幸弘…… 8

英米文化学科のさらなる改革を！

宝利 尚一……10

海外における日本語教育を語る

日本語教育研究シンポジウム開催(報告)

中川かず子……12

ゼミ室紹介

英米文化学科 常見ゼミナール……14

第15回市民公開講座報告 ……16

大学院の窓

黒死病期を生きた人びと

文学研究科 英米文化専攻

修士課程1年 白岩 千枝……17

研究、その足跡

編集後記

……18

……21

北海学園大学人文学部

巻頭言

木と森と

人文学部長 追塩 千尋



京都御所の北側に、相国寺という著名な寺が所在する。相国寺が創建される半世紀ほど前には、その地には蓮光寺(歓喜寺とも)という寺院があった。研究の一環として蓮光寺の位置確定が必要であったが、そのことに私は悪戦苦闘していた。しかし、位置確定のヒントになる記述が『角川日本地名大辞典』京都府の巻にあることを知人より教えられ、漸く確定できた。『角川日本地名大辞典』は私も所有していたのであるが、CD-ROM版であったため、知人より教示を受けた京都府の総論部分はそれには収録されていなかったのである。私は自分の調査の不十分さを反省すると共に、便利ではあるが思わぬ落とし穴がある電子図書類の怖さも知ったのである。

電子辞書を初めとする電子化された図書・史資料類は、1本1本の木に相当する項目を捜し出すには極めて有能であるが、森に当たる全体像を把握するには向いていない。電子図書は図書の索引化、という側面を有しているといつてよい。

電子辞書の普及は目覚ましいものがあり、学生諸君の多くが利用している場面を日常的に目にする。ただ、気になるのは使用している辞書について、どれほどの認識をした上で使用しているのだろうか、ということである。例えば、広く普及している『広辞苑』などの場合、紙ベースであれば編者・収録語彙数・編纂方針・凡例・後書きなどが読む読まないは別にしていやがおうでも目に入ってくる。それを通じて『広辞苑』なるものの特質や、利用に際しての約束事を理解する、ということになる。いわば森を見る訳である。ところが、大半の電子辞書ではそういう部分は割愛されている。そもそも利用者は木が見えれば良いのだから、そうした部分には関心を持たないのであろう。自己が所有している電子辞書に収録されている国語辞典が『広辞苑』であることを知らないといまでは言えないにしても、気に止めないで利用している人も多いのではないだろうか。

辞書は本来工具的役割を持っているものなので、そうした利用の仕方をしてもらってもさほど問題は生じないのかもしれない。しかし、辞書以外の電子図書は冒頭に記したような危険性が有ると思われるのである。いずれにせよ、辞書にしても書物・史資料類にしても、電子化されることにより一つの作品としての個性を失い、バラバラの項目に解体されて行く運命をたどるように思われる。

こうした世界で育った人は、発想が「木を見て森を見ない」傾向になりはしないか、ということが危惧されるのである。すなわち、部分を全体に位置付ける、あるいは全体を見通したうえで部分を位置付ける、という考え方が後退する恐れを感ずるのである。これは若い人ばかりではなく、私も含めて自戒すべきであろう。

2008年3月で、大瀧徹也・野坂幸弘・宝利尚一の三先生が定年で、またブレンダ・カンリフ、アマンド・ゴントの二先生が御都合により退職される。諸先生はまさに「木を見て森を見ない」ことにならないように、これまで教育・学部運営面で尽力されてきた。定年あるいはそれぞれの御都合とはいえ本学を去られることは痛手ですが、これまでの尽力に感謝し今後のご健勝をお祈り致します。

また、人文学部・文学研究科の創設に尽力され、退職後も非常勤としてご指導頂いた菱川善夫先生が逝去された(2007年12月15日)。今後の指針を失ったようで、学部としても痛恨の極みですが、今はご冥福を心よりお祈りしたい。

カナダ・ブロック大学 研修旅行報告

カナダ・ブロック大学での 英語集中プログラム

引率教員 英米文化学科 上野 誠治

今年度で7回目となるカナダ・ブロック大学海外研修旅行（「国際文化演習」2単位）は2007年9月2日より23日までの3週間に渡って実施され、英米文化学科の学生22名がブロック大学での英語集中プログラム（Intensive English Language Program, IELP）に参加した。内訳は、2年生11名（うち2部学生2名）、3年生10名、4年生1名であった。また男女比では男子4名、女子18名と例年同様女子の参加が目立った。

成田から13時間あまりの飛行の後、無事トロントに到着し、入国審査も全員何とか通り抜けることができた。その後、迎いのバスに乗り込んだ我々はほぼ予定通り午後7時過ぎに大学に到着し、IELPスタッフとホストファミリーの出迎えを受けた。到着後、すぐに学生たちはそれぞれのホストファミリーに引き取られていったが、温かい出迎えに喜ぶ一方で、これから始まる英語漬けの生活に不安を感じながらの初日であった。

ブロック大学のIELPとは本来、世界中から集まる学生たちのために用意された14週間の集中プログラムであるが、人文学部の学生はその最初の3週間に参加する。学生たちはプレースメントテストによってレベル分けされ、ほとんど全員が朝8時からの授業を他の留学生たちに混じって受けることになったが、そのため毎日朝早く起床しバスに乗るなどして通学しなければならなかった。授業の他にも、ほぼ毎日のように様々な課外活動が用意されており、学生たちは各国の学生と交流しながらカナダの社会と文化、ナイアガラの滝を始めとする雄大な大自然に触れる貴重な体験をした。

今回は、John Villela先生がクラス担任のような役割を果たし色々面倒を見て下さった。その他にも、IELPスタッフのJackie Angi-Dobosさんを筆頭に多くの方々に大変お世話になった。そのお陰で、学生たちはひとりひとり色々な想いを抱きつつ、長いようで短い3週間をカナダで過ごし、それぞれが新たな目標に向かって進む決意をした大変有意義な研修旅行となったようである。



カナダで研修を終えて……

1部3年 英米文化学科 鈴木 綾華

2007年9月、遂に私にとって初めての海外研修のときが来ました。たった3週間、されど3週間……日本では絶対に味わえない貴重な経験からどれだけ多くのことを吸収出来るか。私にとってこの研修は、今までの自分に対する大きな挑戦となりました。

ブロック大学に到着し、ホストマザーと対面した瞬間から英語漬け生活は始まりました。朝から晩まで英語しか話されず、自分も英語を話さないと生きていけない！！

突然の環境の変化に最初はすごく戸惑いました。しかしホストマザーはとても優しく、私が上手く話せなくても理解しようとしてくれました。ホストマザーと少しでも一緒に過ごす時間をつくるため、夕食のときはお互いにその日あった出来事について話したり、テレビで見たニュースについて話し合ったりしました。こうした日常的な会話に挑戦したおかげで、次第に自分が英語を話すことに自信ができました。それから毎日寝る前に英語で日記をつけて、その日にしたことや新しく聞いた会話表現などを書き残すようにしました。日記をつけることは後から見ても良い思い出になるし、文章をつくる勉強にもなったので、良かったなと思っています。



ブロック大学では、同じIELP (Intensive English Language Program) で学ぶ他国の学生と一緒に朝8時～14時まで授業を受けました。放課後は学生みんなが楽しめる様々なActivityが用意されていて、ナイアガラ観光をしたり、ボーリングをしたり、バーベキューをしたり……。こうしたActivityがより私たちと他の留学生とを結びつけ、自然と英語でのコミュニケーションに慣れることが出来ました。

不安と期待で始まった3週間はあっという間に終わってしまいました。今回の研修でまだまだ自分に出来ることがあるのに気付かされ、そして今のカナダを自分の体で感じる事ができました。今回身に付けた、生きた英語を日本で忘れないよう、継続して学習していきたいです。カナダで本当に充実した時間を過ごせて良かったと思います。



素敵な日々

1部3年 英米文化学科 利波 恵里

自分を成長させたいという気持ちから、私はこの語学研修に参加を希望しました。学校ならば、と親の安心感も得られるということも理由のひとつにあります。“ChangeをChanceに”を目標に掲げていたので、カルチャーショックやホームシックを感じることは全くなく、全てを受け入れることが出来ました。言葉に自信があったわけではありません。ですが、ただ毎日を大事に生きるだけで、こんなにも自分は変わる、こんなにも世界は変わるのだなと思えました。日々繰り広げられる、日本では感じる事の出来ない感動・喜び・驚き・出会いは、たった3週間だからこそ、私の胸に、脳裏に色濃くあるのだと思います。その日伝えたくても言い表せなかったこと、聞き取ることの出来なかった言葉を夜に調べ、次の日言おう、この言葉も調べておこうと英語が勉強ではなく感じるままにスラスラと身に入っていました。実際、帰国数日後に受けたTOEICでは135点上がって

いました。これは、間違っ言葉があれば直してくれる家族や、気さくに話せる友達がいたおかげだと思います。私が仲良くなった韓国人の友達はとても気さくで、お昼と一緒にランチをしたり、家で一緒にチゲ鍋を作ったり、トロントへ観光にも行きました。お互いつたない英語ではあっても気持ちを通わせようという心が表情や仕草にあらわれ、嬉しさを感じずにはいられませんでした。別れ際は悲しさで胸がいっぱいになり、こらえていた涙で前がかすんで見えない程でした。私は韓国の友達へ折鶴を、友達は私に祖国で友情の証であるという小さな女の子の人形をくれました。

文化は違えども英語を通じて、たくさんの人々とコミュニケーションがとれたことは、これからの自分にとって、とてもかけがえのないことであり、これからの私にとって欠かすことの出来ないとても大切な経験です。



英語漬け in CANADA

1部2年 英米文化学科 柏谷 真吾

2007年、9月に夏休みを利用して姉妹校であるカナダの Brock 大学の短期英語プログラムに参加しました。

カナダでの滞在期間中、大学のあるセントキャサリズ市にホストマザーとその娘、同じ学校に通う中国人と共に1カ月過ごしました。語学学校登校初日にクラス分けのテストを受け次の日から授業が始まり本格的な語学研修が始まりました。授業、放課後のアクティビティー全てで英語を使わなくてはコミュニケーションできない環境に置かれることで様々な発見ができました。アジア系の人々は日本に対しての関心が高いこともあって友達作りも会話もすぐ始めることができました。彼らとは今でもメールや手紙のやりとりで連絡を取り合っています。

私の場合、学校よりもホームステイ先の方が英会話を上達する絶好の場でありました。ホストマザーは親日家でよく食卓に日本食を並べてくれました。食事中、食事後ベランダで星を見ながら一緒にくつろいでいるときも会話に付き合ってくれました。会話を重ねることで私の性格をよく理解してくれ、その甲斐あって有意義な生活を送ることが出来ました。3週目にはトロントに出かけMLBを見たりCNタワーで夜景を見たり、バーで酒を飲み交わし、その場にいた外国人とビリヤードをし、その後一夜をモーターで過ごすなどしてトロントを満喫したのは良い思い出です。

帰国後すぐに TOEIC を受け大幅に点数が

伸びていたことを見ると知らぬ間に英語が上達していたことが実感できました。このプログラムに参加するに当たり3つの目標を持って臨みました。目標が達成できたので更に英語を上達したく、これを機に来年度の留学を決意しました。

このプログラム参加を現時点で考えている皆さんには是非参加し何かを得てこれからの大学生活に生かして欲しいと思います。



楽しかったカナダでの3週間

2部2年 英米文化学科 佐藤 友子

私は今回の研修が初海外だったので、楽しみで浮かれる反面、不安もありました。私は2部なので、知っている人がほとんど居らず友達ができるか不安でした。当日ドキドキしながら空港に行ったら、みんな優しくてすぐ不安は消えました。飛行機からカナダを見たとき「すごい！ 外国だぁ！！」と感動しました。ホームステイファミリーに引き取られるときの素早さには驚きました。人見知りがどうか言っている状況ではありませんでした。私のホームステイ先は、ママと中国人の女の子ルワヤンが居ました。最初の3日間は、普通なら20分あれば余裕で着く距離を、迷いに迷って2時間かけて帰っていました。見知らぬ土地で迷うことは危ないと思い、暗くなる前に帰るために会う人ほとんどに道を尋ねました。そのおかげで、人に話しかけることに臆病にならなくなりました。授業はもちろん全て英語なので辛いときもありましたが、辛い分自分の為になりました。

アクティビティーでナイアガラを見たとき、衝撃を受けました。3回ナイアガラに行きましたが、行く度に感動しました。休日のアクティビティーで、トロントに行きました。セントキャサリンと違って、ビルが立ち並ぶ都会でした。ビル風がとても冷

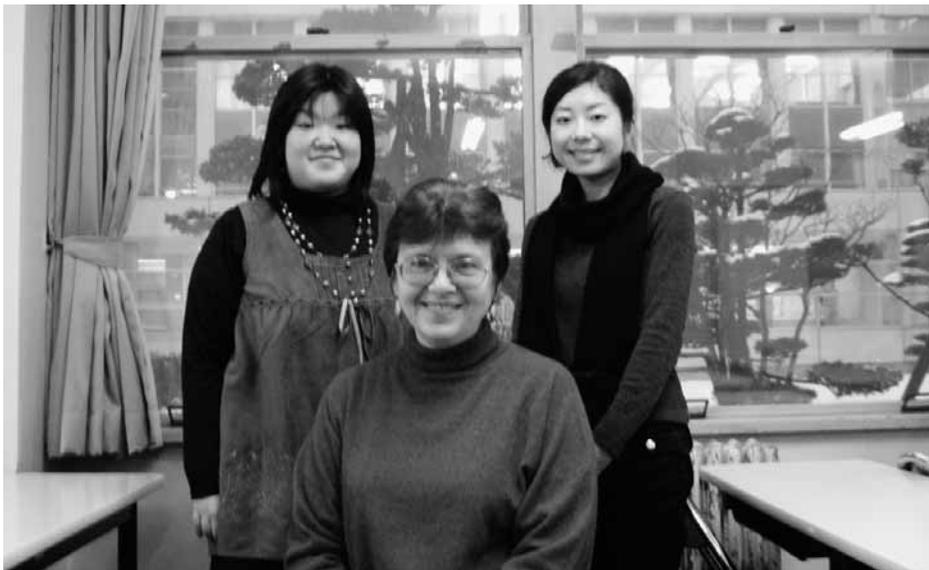
たい中、ある友達は、まさかの半袖でした。トロントにもびっくりしましたが、それ以上に半袖の友達にびっくりしました。チャイナタウンに行ったことは強烈な思い出になりました。最後の夜ルワヤンと沢山話しました。すごくわがままでけど妹みたいな存在でした。最後の朝、ママが学校まで送ってくれました。車中、もっとママと話せば良かったとずっと後悔しました。そして、またいつか絶対来ようと思いました。

カナダでの生活は今まで生きてきた中で一番中身の濃いもので、一生の思い出です。ルワヤンとは今も時々メールのやり取りをしています。沢山のひとと出会って、沢山の経験が出来て、カナダに行って本当に良かったと思います。



第39回 全道ロシア語弁論大会

2007年11月17日(土)、日本ユーラシア協会北海道連合会、北海道、サハリン州行政の3者が主催する第39回全道ロシア語弁論大会が道庁赤レンガ庁舎で行われた。参加者24名(大学生・大学院生17名、高校生3名、一般4名)の内、8名が本学学生(Aクラス2名、Bクラス6名)だった。Aクラス(5分間スピーチ、質疑応答、詩の暗唱)とBクラス(3分間スピーチ)に分かれてスピーチが行われ、経済学部地域経済学科4年の加藤大輔君がAクラス3位、人文学部英米文化学科3年片岡珠理さんがBクラス2位、人文学部日本文学科3年の阿部さとみさんがBクラス3位の優秀な成績を収めた。学生たちの努力は言うまでもないが、熱心なご指導をいただいた人文学部非常勤講師のエレーナ・ヘインズ先生に負うところが大きい。ここに感謝の意を述べたい。(寺田吉孝 記)



左から阿部さとみさん、ヘインズ先生、片岡珠理さん



阿部さとみさん



片岡珠理さん

詩への希望

日本文化学科教授 野坂 幸弘

平成13年の春、〈新任の挨拶〉のような短い文章を、この『人文フォーラム』(15号)に書かせてもらってます。私はその文末を「それはたとえば、専門の近代文学研究が、その存立の基盤ごと変動せざるをえないような目下の状況に対処するために、少なくとも方法論的には、自分がこの領域に関わろうと考えはじめた当時に遡って確かめなおすほかに道はないのだという決意といっても良いようなことなのですが、まずそのための体調維持を考えて、適当な散歩の道を探すのが先決なのだ」と周辺をうろろしている此の頃であります」とやる気があるのかないのか解らないようなかたちで結んでおりました。

いま退職を前にして、この7年間を振り返ってみますと、実現できたのは散歩を習慣にすることだけです。これは予想以上にうまくいきました。しかし肝腎の文学研究のほうは、ある種の脱力状態が続いてまったくできていません。毎朝の散歩に集中しすぎたということでしょう。

そうこうしているうちに、平成17年1月中旬の深夜、街なかで転んで顔を打ち、右目を損傷し、網膜剥離が生じていることがわかりました。2月と9月に二度にわたって入院して手術・治療を受け、いまも通院加療中です。さいわいに片目の失明は免れました。しかし結果的には、論文・資料などの小さな文字が極端に読みにくくなり、文字を書くことも思うにまかせず、画面を拡大して使っているパソコンが唯一の頼りなので

すが、それも涙と痛みのせいで、わずかな時間しか使えないありさまです。

これが研究を諦めて〈詩への希望〉などこのところ言いはじめた(実際には、シンンになるまえにシジンになりたい、などと騒いでいます)直接的な身体的な理由です。

もっとも〈詩〉に対するおもいは若い頃から強くあって、こっそりと書きためていました(そのもっと前に熱中したのは映画ですが)。そして生活のために文学研究を職業にしようと考えざるをえなくなったころ、私家版の詩集を一冊つくって友人や知人に配りました。〈詩〉を断念するためです。厳密に考えて、研究と両立させることができるとは、当時の私には考えられなかったし、いまもそうおもっています。

その後も、さまざまな転機あるいは状況の変化に遭遇して、自分の研究方法そのものをゼロ段階に戻って検討しなければならぬというようなときに、〈詩〉の女神が誘惑的にすがたをみせたりするのを、しばしば横目にみておりました。そんなときには授業で〈詩〉を取り上げたりすることで誤魔化していたわけです。ある時、学生に「講義を聞いていて、〈詩〉が好きなのか嫌いなのか解りません。どっちなんですか?」と迫られ、答えに窮して「近親憎悪のような……」とお茶を濁したことをおもいだします。北海学園大学にきて二年目から、二部の授業では〈詩〉を取り上げています。

それはそれとして、知人の何気ない誘いに、その場のなりゆきであとさきも考えず

に、やってみると乗ってしまい、1年まえの3月に街の酒場でおこなわれた〈詩の朗読会〉なるものに参加した次第です。初めての経験で、人様の前でそういう振る舞いをする自分と、朗読があまりにも拙いことに驚く一方で、いろいろなことがわかったようにおもいます。自分の作品について、特に読みにくさという面から考えなおしているうちに、今後の書きかたに役立つかとおもわれるような発見もありました。

退職後は、広い意味での〈詩〉を生活の中心において専念します。とてもゆしみなのですけれども、〈枯れ木に花〉ということばをおもいだして、なんだか懽然とする気分です。とはいうものの——老木に花の咲かんが如し（世阿弥）。



英米文化学科のさらなる改革を！

英米文化学科教授 宝利 尚一



北海学園大学の8年間、1、2部人文学部学生、大学院院生、留学生と共に学び、共に研究し、共に喜びを分かち合えたことに何よりも感謝したい。また2001年の「9.11」米同時多発テロ事件後の米欧メディアのイスラーム報道検証に続いて、日本メディアの戦争報道について調査と分析を続ける機会を与えられたことにも感謝したい。そして、いつも無理な注文を聞いてくれた人文学部事務局と大学図書館のすべてのスタッフに感謝したい。

4年前、別れのあいさつで村山出元人文学部部長が、若さとの共存こそかけがえのない教師冥利と言われたことを、今実感する。元ゼミ生やメディア論、現代国際関係論を履修した元学生らと卒業後も交流できることに感謝したい。

開設1年後の北海道大学大学院、国際広報メディア研究科（現国際広報メディア・観光学院）で7年間、社会人や留学生らと学習できたことに感謝したい。出身国も出身大学も異なる教員、院生が一丸となって大学院を盛りたて互いに磨きあっている現場で、僅かながらも協力できたことに感謝したい。

札幌で発行されている小さな月刊誌に「新聞比較論」を4年間執筆できたことにも感謝したい。北海道では北海道新聞が圧倒的な部数を誇り、圧倒的な影響力を持つが、道新の主張がすべて公正、公平で正確とは言いきれない。道新と他の有力新聞の社説を比較することで読者は多様な意見がある

ことに気づかされるはずだ。2007年12月から毎日新聞が有力紙の社説比較を始めた。私の「新聞比較論」に刺激されたため、と信じている。

北海学園大学への私の感謝の気持ちは尽きないが、別れのあいさつで強調したいのは「英米文化学科のさらなる改革」である。

第1点は専門科目名と科目内容を正し、学生の不利益を解消することである。「現代経済論」は経済学部の講座ではない。「米経済の歴史と現状」を学ぶのだという。シラバスを読まなければ内容が分からない。他にも「ヨーロッパ文化論Ⅰ」は実質的にキリスト教文化論であり、「ヨーロッパ史Ⅰ」は英国史であり、「ヨーロッパ史Ⅱ」はフランス革命史である。また「現代人類学」と「文化人類学」がなぜ並列しているのか、学生には分かりづらい。こうした事例は、履修する学生に対して不親切である。

第2点は冊子「英米文化学科1年生に薦めたい本」を早急に発刊することである。日本文化学科は3年前から新入生に配布し、3、4年次演習での調査、研究の一助にしている。2007年春、日本文化学科から英米文化学科に発刊の打診があったと聞くと、英米文化学科は消極的だったという。これは英米文化学科の新入生への配慮が全く足りないことを示している。

第3点は最も重要かつ緊急の問題で、英米文化学科に「英米」いずれかの大学との交流協定を早急に実現することである。私はロシア協定校委員を2年、国際交流委員

会委員長を2年務めた。英米大学との交流実現を強く求めたが、まだ実現に至っていない。英米文化学科の学生がカナダの大学としか交流できないとしたら、不自然だ。改革すべき点は他にも多々あるが、現時点では以上の3点を早急に具体化してもらいたい。

英米文化学科がこうした「改革」に消極的であるとは考えたくないが、結果的に「改革」を遅らせているように見える。授業科目名や学生への推薦図書、協定校問題などで、学生に不利益にならないよう学部としての整合性が求められよう。

3年半前、朝日新聞記者が捏造メモを作成し、その一部が記事として紙面化された。捏造が発覚した時、朝日新聞社長が「解体的な出直し」を図ると約束した。英米文化学科も「解体的な出直し」の決意で、よりよい教育、研究環境を早急実現する必要がある。

海外における日本語教育を語る

日本語教育研究シンポジウム開催（報告）

日本文化学科・文学研究科 教授 中川かず子

去る11月17日土曜日、日本カナダ学会北海道支部との共催により日本語教育研究シンポジウムが開催された。プログラムは、1部がカナダ・ビクトリア大学の野呂博子准教授による基調講演「多文化社会カナダにおける日本語教育」、2部が人文学部卒業生による英国、タイ、カンボジア、中国における日本語教育事情報告という内容であった。会場の本学教育会館1階AV4番教室に、日本カナダ学会関係者、学部学生、文学研究科院生など約60名が集まり、3時間余りの長時間にわたるシンポジウムを積極的に盛り立ててくれた。以下、その1、2部の概要を報告する。

まず、基調講演者の野呂博子氏は、カナダにおける日本語教育を歴史的、また対象別の視点から概観した：1) 日系移民、海外子女を対象とする「継承語」としての日本語教育（戦前～戦後）；2) カナダ住民を対象とする「国際語」としての日本語教育（80年代～現在）；3) 日系、非日系、多文化社会の「一言語」としての日本語教育（～現在）

1) カナダ日系人のための最初の日本語学校は1906年のBritish Columbia州バンクーバー市に設けられ、以来、戦前と戦後（戦中は日本語学習禁止）70年代位まで「継承語」としての日



本語、日本文化を伝える教育が関係者により続けられた。80年代からは海外子女が増え、日本語教育は補習目的の傾向を強めていく。

2) 日本の高度成長が世界に注目される7～80年代以降、またアジア諸国からの移民が増大する80年代に入り、「外国語」としての日本語学習者が増えていく。アジア研究学部、研究センターの設立により高等教育機関で学習者が増大する（国際交流基金2003年度調査では、初等・中等教育段階で1万人、高等教育段階で8千人、その他4千人であった。現在はやや減少の傾向が見られる）。学習者の多くがアジア系移民、留学生である。その背景には、漢字圏からの学習者だと日本語に親しみを感ずること、日本語学習以前からアニメ、漫画など日本の子供向けポップ・カルチャーに親しみ日本への関心が強いことなどが挙げられる。

3) 「継承語」と「国際語」の境界線のはっきりしない「進化する日本語教育」の出現。日系人（二世～四世）と西欧系カナダ人との間に生まれる子供、日本人と西欧系カナダ人との子供の増加により日系社会構成員に変化が生じる。さらに、「日系人」の定義の多様性が論じられ、「血統」か「自己選択」かの論議による流動的な民族意識が見られている。多文化社会カナダならではの現象であろう。

シンポジウム後半の第2部では、人文学部卒業生による海外の日本語教育事情紹介で、4人による発表がなされた。最初に、一期生の山田智久氏（本学非常勤講師）から英国の日本語教育事情が報告された。外交官などの世界的なレベルの日本研究から始まり、その後、ロンドン大学を中心に20世紀初頭、戦時中と日本語教育が重点的に行われ、その蓄積が戦後の日本語教育の発展につながっている。現在は英国政府の

後押しもあって初等・中等教育機関が増加、その学習者数は全体の60%に当たる9,700人に上るといふ。学習目的は対象別に異なるが、文化(伝統的、サブカルチャー)への関心が高い。また、経験的学習、学習者主体の教授法が特徴である。教師は、学校教育以外(271人)、初・中等教育(210人)、高等教育(145人)の順に多い。英国内、ヨーロッパ地域内の教師間ネットワークがある。二番目に竹本恭子氏(2000年卒業)からタイの日本語教育事情が報告された。始めに、タイと日本の経済的、文化的つながりと、それとの関連で日本語学習者の学習目的や動機について説明された。タイでは、日本の経済と文化への関心が日本語学習者を引き寄せている。日系企業の多いタイでは、日本語習得が就職に有利になる。さらに、日本のアニメ、漫画、歌などの大衆文化が浸透し、日本語への関心を高めている。対象別では、初等・中等教育レベルの機関が約6割を占め、その学習者も最も多い(約32,000人)。教師は各教育機関とも増加傾向にあり(1,000人以上)、日本人教師の割合は全体の40%だという。三番目は因麻衣子氏(2000年卒業)のカンボジア日本語教育事情である。1993年以降、青年海外協力隊(JOCV)の派遣や民間NGOの支援により王立プノンペン大学を中心に日本語教育が行われる

が、2005年より大学日本語学科や本格的な講座が開設されていく。プノンペン市では日系企業がさほど多くないので、学習者の多くは就職やビジネスという明確な目標を持つまではいかないという。一方、アンコールワットのあるシェムリアップでは観光ガイド育成の日本語教育が中心で近年学習者が増えている。また、プレイヴェーン州にNGOによる中・高一貫の6年制学校があり、日本語教育が実施されている。教師は内戦による影響で地元の20~30代前半の若手教員が多く、日本人教師はまだ少ない。最後に小森千佳江氏(2001年卒業)が中国日本語教育事情を報告。中国では、日本との関係や国内の社会情勢の変化により、ここ数年大学の外国語科目として日本語を選択する者が多くなった。現在、学習者数は684,366人(2006年国際交流基金調査)で、世界で韓国に次いで2番目に多い。大学の学習者数が多いのが中国の特徴であり、卒業後の就職に有利であることがその目的である。中国人教師とともに、日本人教師の需要も大学、日本語学校(企業の人材教育の一貫も)を中心に増えており、今後、日系企業への就職、日本の大学への進学を目指すといった明確な目的をもつ学習者を支援できる教師間の教育・研究の連携も望まれる。

以上が本シンポジウム1、2部の概要である。紙幅の関係上、かなり端折った内容とならざるを得なかったことをお詫びしたい。基調講演者の野呂博子氏、4人の卒業生の各氏、並びに積極的な参加者に対し、この場を借りてお礼を申し上げます。



ゼミ紹介

英米文化学科 常見ゼミナール



3年・4年ゼミ生（1部）

キーワードは「イギリス、歴史、文化」、アプローチは「自由」

‘ちょっぴり天然な先生’のもとで、のびのびとそれぞれの興味・関心を追究してそれぞれの形に表すことにこだわっています。

4年生：卒業論文

ただいま完成しました。

石河 史行：イギリスを表象するブリタニアとジョン・ブルの由来をたどりました。みんなの熱意が伝わってくるとてもホットでやりがいのあるゼミでした。

岩城 法之：19世紀を中心に、ジェントルマン階級とスポーツとの関係に着目し、スポーツという道具を使って彼らがいかに子弟や社会を教育したかを述べました。

近江 典加：カントリー・ハウスの変遷を18世紀を代表する建築家ロバート・アダムに焦点を当てて考察しました。ゼミの穏やかでなごやかな雰囲気が好きでした。

小寺 里絵：スコットランド女王メアリとイングランド女王エリザベスの対立の背景を両国関係、宗教政策や王位継承を軸に論じました。ゼミはいつも優しさあふれる場所です。

坂本 佳文：イギリス産業革命の影響に関する研究史をまとめ、再評価する研究をしています。いろんな人がいるゼミで、自由勝手にやっているようで最後は必ずまとまる結束の固さが売りです。

佐々木詠梨：イギリスにおける子どものイメージの変遷を画像や文学作品を通して論じました。褒め上手な先生のもとで和気藹々と勉強

することができました。

筒塩 友紀：世界で最初に陸上の長距離移動を可能にしたイギリスの鉄道について、社会的背景や発明家・企業家たち、政府との関わりなどを検討しました。レポートをまとめたりする作業が多かった分、たくさん学ぶことができました。

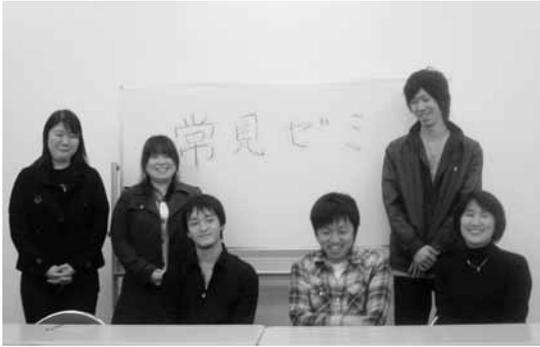
水上 美佳：ときには厳しいつつこみを受けながらタータンの歴史を完成できてうれしい。ちょっぴり天然な常見先生を中心に（笑）、ゼミではメリハリのある活動ができました。

山内 彩加：クリストファー・レンが、ロンドンに与えた影響を輝かしい功績だけでなく、彼を襲った不遇も交えて論じました。図版や写真にもなんまら力入れましたよ。

大塚 航：ハロッズが時代の流れと共に形を変え、変貌を遂げて名門デパートと呼ばれているまでになった背景を紹介しています。毎回+αが得られるゼミでした。

佐々木洋輔：1960年代のイギリスは様々な個性を持ったロックバンドを生み出し続けました。何故それが可能だったのかをアートスクールという教育機関に注目して考察しました。

田中 栄子：テューダー朝の野望と権力争いの狭間に咲いた1輪の白い花“ジェーン・グレー”の儚くも凛々しい16年の生涯を辿りました。



3年・4年ゼミ生（2部）

「小公子」や「秘密の花園」を夢中で読んだ幼い頃のように「英国文化と歴史」の話にいつもワクワクと心躍らせた2年間でした。

卒業生：ただいま活躍しています。

渡邊加奈子：常に気合いを入れる必要のあるゼミで、それが学ぶことの楽しさを知るきっかけとなります。卒業論文「19世紀の民衆文化」を書き上げた時の達成感は想像を超えたさすがしさ。頑張った者だけが得ることのできる快感です！ 爆睡しておもいきり叱られたのも楽しい思い出です。（英国留学中）

山口 礼仁：4年次は就職活動に論文にと各自が追いつめられるなか、何よりのエネルギーになったのがゼミとその仲間でした。一つの物事を追究し積み重ねる大切さ、自身で疑問を持ち研究する事の面白さを学びました。社会人一年目、心折れそうな事が多くありますが、ゼミを通して学び得たことが仕事の各面に繋がっていると強く感じます。（北洋銀行）

浜野富美子：ゼミでは提出レポートについての質疑応答やあまりに難しい英文テキストに何回も辞書を

引きながら錆びた脳をフル回転させ学問しているという実感を味わいました。卒論に書いたヴィクトリア期の女性旅行家で明治11年に北海道にも来た「イザベラ・バード」は、60歳までに100カ国訪問を目標にしている旅好きな私の生涯の研究テーマにもなりました。卒業後も若いゼミ生と親交があり、ゼミは私の一生の思い出です。（円山フードサービス代表取締役）



卒業論文集：ゼミ生全員の2年間の研究がぎっしり詰まった財産です。中表紙は先生のお手製、学生ひとりひとりへのプレゼント

◎ 第 15 回市民公開講座報告 ◎

平成 19 年度の市民公開講座は、10 月 6 日（土）から 11 月 24 日（土）にかけて 5 回にわたって開催されました。今年度は、『いのちとところ』をテーマとして、人文学部教員 5 人によるそれぞれ専門の領域から、私たちにとって身近でかつ重要なそして深刻な問題である「生と死」をめぐって、講演を行いました。

趣旨（『市民公開講座』パンフレットから）

現代社会に生きる私たちにとって、「いのち（生命）」をめぐる問題は、環境・健康・医療等々多様なテーマが交錯する形で現れてきます。しかもそれらは今や、地球大の規模で考えなければなりません。高齢化が進むにつれて、ここに老いや死という現実も加わってくるとすれば、「いのち」は生死を超えた、あるいはそれを包みこむ「ところ」の問題にかかわってきます。今回は、そこまでを視野に入れて、参加される方々とともに考えていきたいと思いません。

以下、5 回の講義の内容と受講者から代表的なコメントを紹介します。

第 1 回（10 月 6 日）竹内 潔教授「いのちの科学」

現代における最先端の生命科学の事例が紹介され、「いのちの創造」「いのちの検証」のもたらず問題を、科学的な理解と人間の欲望とのギャップという視点から取り上げ、現代社会の問題点を論じました。

映像を交えての工夫された興味深い講義との声が寄せられました。

第 2 回（10 月 20 日）小野寺静子教授「万葉のこころ」

上代の日本人が「心」そして「いのち」をどう捉え認識していたかを、万葉集の歌に見られる具体的な「語」「表現」から読み解いて行きました。

万葉集の豊かさがよく伝わってきた、万葉集を改めて読んでみたいとの声が寄せられました。

第 3 回（10 月 27 日）桑原俊一教授「古代オリエントにおける死と再生」

オリエントとメソポタミアの地理的位置を語源から押さえた上で、さらに地理的自然環境を踏まえ、シュメール文学・アッカド文学に現れる「ドゥムジ神とイナンナ」の話が、東地中海の各地に伝播する過程でどのように変容したかについて論じました。

漠然とした古代オリエントのイメージが、地理的・気候風土の話の踏まえての文学の解説を通して、より具体的に理解できた、ギリシャ神話も読んでみたいとの声が寄せられました。

第 4 回（11 月 17 日）追塩千尋教授「日本仏教における死生観」

飛鳥以前の伝統的の死生観・世界観から始まり、奈良・平安時代には仏教的死生観をどのように日本人は受け入れたかについて、主に浄土教を中心に考察しました。

幅広いジャンルからの引用を通して、日本人の死生観を辿ることができ、興味深かった、もっと時間があればよかった、特に古事記を読んでみたいという声が多くありました。

第 5 回（11 月 24 日）安敏敏教授「近代の欧米に見られる死生観の変遷」

新井満「千の風」を手はじめに、欧米における死生観の変遷を辿っていきました。その際、西洋文化を考える上で、その一つの源泉が古代ギリシアにあること、また二つ目の源泉としてヘブライの聖書の伝統が流れ込んでいることを押さえておくことの重要性を強調されました。

前の 4 回の講義の内容と比べながら、いろいろと死生観について考えることができ、総まとめの位置づけとしてもよかったとの声が寄せられました。

今年度の一般受講者は 49 名で、そのうち連携している「道民カレッジ受講生」は 7 名、他に本学の学生（学部・大学院生）9 名の登録がありました。これは、昨年度より 10 名余り多い数字です。ちなみに 50 代から 70 代の方が全体の 6 割を占めています。

時代と地域の異なるさまざまな「死生観」を講義を通して、現代に生きる「私」の問題として考える広い視野が得られてよかった、更に関連する本を読んで勉強してみたいなど、この講座をきっかけにさらに発展的に学んでいこうという声が多く寄せられました。また、今後の講座への熱い期待も寄せられるなど、熱心な受講者に支えられ、好評のうちに終了しました。

大学院の窓

黒死病期を生きた人びと

文学研究科 英米文化専攻 修士課程1年 白岩 千枝

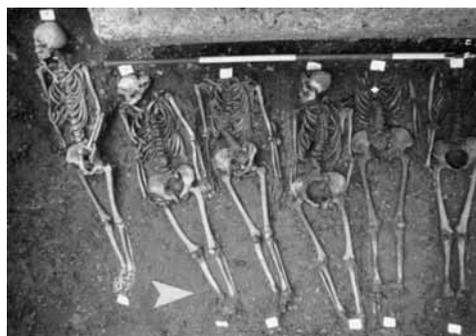
学部のゼミでペストに関する資料を読んだのがきっかけとなり、この疫病を詳しく知りたと思うようになりました。卒業論文では14世紀のヨーロッパで大流行した黒死病と17世紀にロンドンで流行した大ペストを比較検討しながら、その影響について考察しました。その結果、それまで勉強して積み上げてきたものを大切にしながら、さらに専門的な知識と英文を読み込む力をつけたいとの強い思いから大学院への進学を決めました。

現在は、「黒死病を当時のイギリスの人びとはどのように受けとめたか」というテーマのもとに研究を続けています。1348年を中心とした周期的な黒死病の流行が人口を激減させ、経済活動や社会活動の衰退をまねきました。それだけではなく、この疫病は、生き残った者に対して死の恐怖を与え続け、彼らの生活や文化、社会を変えるほどの影響をもたらしました。黒死病期の様々な記録が集成されている史料集や研究論文を読み込み、これらの問題についてまとめたいと思います。

写真は、ロンドンのスミスフィールド東の旧造幣局跡地で1980年代に発掘された黒死病期の遺骸です。この墓地については、ランベス宮殿（カンタベリー大司教公邸）に勤める書記ロバートが「疫病は（1348年の）諸聖人の日（11月1日）頃にロンドンに到達し、……毎日200以上の遺体がスミスフィールドの東隣に急遽つくられた新しい埋葬場所に埋められた」と記しており、それが20世紀末に考古学者の手で確認されたこととなります。一方、アイルランドのキルケニーでは、フランシスコ会の修道院がこ

の疫病に襲われ、ひとり生き残ったジョン・クリンが年代記を記した羊皮紙の隅に「これからやってくる死を死者たちの間で待っている私が真実として聞いたこと、見たことを書き留めた。……将来、アダムの子の誰かが疫病から逃れ、生き残って私が始めた作品を続けることができるとしたら、この羊皮紙を遺贈する」と記しています。自身に迫りつつある死を案じながらも、年代記を遺そうとする彼の意思を読み取ることができます。

残されている史料のほとんどが聖職者によるもので、制約があるのも事実ですが、史料を丁寧に読むことで見えてくる人びとの姿をとらえたいと思います。



M. Kelly, *A History of the Black Death in Ireland*, Stroud, 2001, Plate 17.

■学会・研究発表

テレント・アイトル 「13世紀クビライ・ハーン日本侵略と日本の死生観について」10月20 - 21日、中国人民大学国学院主催「国際モンゴル歴史・言語シンポジウム」、中国北京市中国人民大学逸夫ビル◇「13世紀仙台の『蒙古の碑』について」10月27 - 28日、北京師範大学・大阪民族博物館共同主催「自然環境と民俗地理学日中国際シンポジウム」、中国北京市北京師範大学メインビル

本城 誠二 日本アメリカ文学会第17回支部大会（12月1日藤女子大学）シンポジウム「アメリカにおけるユダヤ的なもの——文学・音楽・映画表象をめぐって」の司会兼講師：講師としての発表タイトル「Jewish Jazz Singer with Blackface ——ユダヤ人と黒人の交差する『ジャズ・シンガー』」

米坂スザヌ Transforming a course in English phonetics with Moodle. 10月、Sapporo, Gakuin University 7th Annual CALL Workshop, 札幌.

追塩 千尋 「円照の勤進活動と浄土教・密教」7月、北海道印度哲学仏教学会大会、苫小牧駒澤大学

安酸 敏真 「いま《キリスト教学》を問う——学問史的考察」6月、日本基督教学会北海道支部会、北海学園大学

土屋 博 「キリスト教研究の文化的・社会的場」6月、日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム（全体テーマ「キリスト教学再考」）、北海学園大学

Patrick O'Brien 「Cultural Displacement & Hollywood」10月27日、The Charles Martel Society Conference, Atlanta, Georgia

常見 信代 「史料にあらわれた 'thane'」、9月3日、「中世ブリティッシュ・ヒストリー研究会」、北海学園大学

大谷 通順 「元雑劇所描写的関撲風俗一擲銭賭博的文化含義」11月、中国伝統文化および元代文献国際学術シンポジウム（北京師範大学古籍研究所・北京大学中国古文献研究センター・『全元文』編集委員会・『全元詩』プロジェクトチーム主催）、北京師範大学京師大慶（中国）

寺田 吉孝 パネルディスカッション『ロシ

ア語教育の現状と課題』パネラー、7月、日本ロシア文学会北海道支部会、札幌大学◇《Учебная лексикология. Терминоведение и терминография, Учебник для чтения с лингвострановедческим словарём》, 9月, XI Конгресс международной ассоциации преподавателей русского языка и литературы (国際ロシア語ロシア文学教師協会 第11回大会)、ヴァルナ自由大学（ブルガリア、ヴァルナ市）

中川かず子 「留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果」（共同研究発表）、9月、日本教育心理学会第49回総会、文教大学越谷キャンパス

■著作・論文など

上野 誠治 「古英詩『十字架の夢』注解(3)」、2007年6月、『北海学園大学学園論集』第132号

テレント・アイトル Beyond Enemy and Friend? A Multitude of Views of Life and Death Centering on the 'Mongolian Gravestone' 2007.7. *INNER ASIA* Vol. 9. No. 1. The Mongolia and Inner Asia Studies Unit, University of Cambridge. Global Oriental Ltd.

Kirkwold, L. (2007a). Peter Gzowski's early career as journalist and broadcaster: From the mid-50's to the mid-70's. In D. McMurray & T. Mori (Eds.), *Canada Project in Kyushu Symposia: Volume 2* (pp. 11-31). Kagoshima: Canada Studies Centre in Kyushu, The International University of Kagoshima. [Reprinted with editing from HGU's Studies in Culture No. 31.] ◇ (2007b). Applications of universal grammar (UG) in the ESL/EFL classroom. (ERIC Document Reproduction Service No. 496782).

[Reprinted with editing from HGU's Studies in Culture No. 32.]

濱(浜) 忠雄 『ハイチの栄光と苦難—世界初の黒人共和国の行方』12月、刀水書房◇「ハイチによる『返還と補償』要求と植民地責任」5月、科学研究費補助金（基盤 B）研究成果報告書『「植民地責任」からみる脱植民地化の比

較歴史学的研究』

宝利 尚一 「日本メディアの戦争報道」(下) 10月、『人文論集』第37号、北海学園大学人文学会

Yonesaka, S. M. & Metoki, M. (2007). Teacher use of students' firstlanguage: Introducing the FIFU checklist. In K. Bradford-Watts (Ed.), JALT2006 Conference Proceedings. Tokyo: JALT.

追塩 千尋 「円照の勸進活動と浄土教・密教」12月、『年報 新入文学』第4号、北海学園大学大学院文学研究科

安酸 敏真 翻訳：カール・バルト『十九世紀のプロテスタント神学 下巻』(カール・バルト著作集13) 10月、新教出版社(佐藤貴史、濱崎雅孝と共訳)。「11シュライエルマッハー」、「12ヴェークシャイダー」、「13デ・ヴェッテ」、「14マールハイネケ」、「15パウエル」、「16トルック」、「17メンケン」、「20シュヴァイツァー」、「21ドルナー」、「22ミュラー」、「23ローテ」、「24ホーフマン」、「25ベック」、「26フィルマール」、「27コールブリュック」、および「29リッチェル」を翻訳し、巻末の「解説」を執筆◇事典項目：「F. W. グラフ『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』」、「トレルチ『トレルチ著作集』」、「レッシング『賢人ナータン』」、島園進・石井研士・下田正広・深澤英隆編『宗教学文献事典』11月、弘文堂◇「アウグスト・ベークと文献学」10月、『人文論集』第37号、北海学園大学人文学会

土屋 博 「宗教研究における『当事者性』とスピリチュアリティ論」12月、『年報 新入文学』第4号、北海学園大学大学院文学研究科

小野寺静子 「大伴三依と大伴坂上郎女」12月、『年報 新入文学』第4号、北海学園大学大学院文学研究科

寺田 吉孝 《Учебник для чтения с лингвострановедческим словарём》, 8月, Мир русского слова и русское слово в мире Том 2, Магял и общество русистов Болгарии, Helon Press, Sofia

井上 真蔵 「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響—板橋区とパーリントン市の

ケースについて」10月、『人文論集』第37号、北海学園大学人文学会

大濱 徹也 「フロイスの見た信長」『〔新版〕信長—「天下一統」の前に「悪」などなし—』(プレジデント社、11月)所収◇『アーカイブズへの眼—記録の管理と保存の哲学—』刀水書房、12月・A5判220頁◇「大地の祈り」『年報 新文学』第4号、北海学園大学大学院文学研究科、12月

■講演

テレント・アイトル 「思考様式の相違——起源における東西と日中の情緒について——」9月6日、内モンゴル大学創立50周年記念講演、内モンゴル大学多目的ホール◇「超域文化研究の方法論——13世紀から現在までの日モンゴルにまつわる文化的象徴記号をめぐって——」9月10日、内モンゴル大学大学院民俗学社会学科主催、民俗学社会学会議室◇①「クビライ・ハーンの日本侵略戦争の起因と戦後処理について」、②「東西文学及び日中蒙の文学の起源における相違」10月29日、北京市中央民族大学大学院モンゴル文学研究科主催、同大学教学ビル◇『『蒙古の碑』——敵味方を超えられるか——』11月6日、北海道モンゴル親善協会第13回講演会、北海学園大学国際会議場

安酸 敏真 「近代の欧米に見られる死生観の変遷」第5回「いのちとこころ」11月24日、北海学園大学人文学部第15回市民公開講座、北海学園大学教育会館

土屋 博 「ファミリーズムとキリスト教」12月、第54回「コルモス」(「現代における宗教の役割研究会」)全体会議基調講演(全体テーマ「ファミリーズムの再構築——宗教から家族を問いなおす——)」、京都国際ホテル

小野寺静子 「万葉のこころ」10月、第15回市民公開講座、北海学園大学人文学部◇「熟田津出立の歌」11月、札幌市生涯学習教育センター◇「近江に都を遷す時の歌」11月、札幌市生涯学習教育センター◇「春秋判定歌」11月、札幌市生涯学習教育センター◇「額田王の恋歌」11月、札幌市生涯学習教育センター

中川かず子 「日本語敬語論—二つのアプ

ローチ」、3月、ボランティア日本語教師会「たんぼぼ」研修会、北海学園大学◇「日本語非母語話者に対する対象言語別音声指導について」、10月、ボランティア日本語教師会「窓」研修会、札幌国際学生交流会館

井上 真蔵 基調講演：「転機にたつ姉妹都市交流—今、カナダから何を学ぶか—」第16回北海道・カナダ姉妹都市会議（北海道カナダ協会主催）、12月3日、かでの2.7

■評論・エッセイなど

テレント・アイトル 書評：「芝山豊・岡田和行編『モンゴル文学への誘い』（明石書院、2003年）」2007年3月、『日本比較文学』第49巻、日本比較文学会機関誌

濱(浜) 忠雄 「絵画に見るフランス奴隷解放」11月、『北海道新聞』2007年11月6日付夕刊

宝利 尚一 新聞比較論「因縁の朝日・安倍対決再燃か」『月刊ウィング・サッポロ』2007年7月号◇「高校野球と朝日新聞の責任」同8月号◇「社説盗用と共同論説の問題点」同9月号◇「格好のテレビネタで自民惨敗」同10月号◇「アマチュアは紛争国に入るな」同11月号◇「『癒し型』を見守るメディア」同12月号◇「読売は大連立を仲介したのか」同2008年1月号◇「メディアは十分に機能したか」同2月号

安酸 敏真 書評：フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ著、近藤正臣・深井智朗訳『ハルナックとトレルチ』（聖学院大学出版会）12月、『年報 新人文』第4号、北海学園大学大学院文学研究科

土屋 博 「学問は楽しい」5月、『大学案内2008』、北海学園大学◇「フリードリヒ・マクス・ミュラー『宗教学入門』」他3項目、11月、『宗教学文献事典』、弘文堂◇「キリスト教の祈りと願い」12月、『大法輪』平成20年1月号、大法輪閣

小野寺静子 「古典散策 わけをば死ねと思へかも」11月、『藝林』70-11、藝林発行所

大瀧 徹也 「涙—大地に生きる思い—」『北海学園大学図書館報 図書館だより』第29巻2号（通巻182号）7月◇「人間が人間である

ために—『スモール イズ ビューティフル』が問いかけていること—」『北海学園大学図書館報 図書館だより』第29巻3号（通巻183号）10月◇「大地の貌を読む」『北海学園大学図書館報 図書館だより』第29巻4号（通巻184号）2008年1月

■研究費

常見 信代（研究分担者） 基盤研究B、研究課題「中世ブリティッシュ・ヒストリーの射程と可能性」（平成16年度—19年度）

■その他

追塩 千尋 北海道説話文学研究会との共編「北海道大学附属図書館蔵二巻本宝物集校訂本文」10月、『人文論集』37号、北海学園人文学会

Patrick O'Brien 「The American Studies AssociationのInternational Committee」に入会（2007年度より3年間）

寺田 吉孝 第39回全道ロシア語弁論大会審査員、2007年11月、日本ユーラシア協会北海道連合会・北海道・サハリン行政府主催、北海道庁赤レンガ庁舎

中川かず子 北海道学生競技ダンス連盟主催「後期新人戦」大会会長、2月、北海道大学第二体育館◇北海道学生競技ダンス連盟主催「八種目選手権大会」大会会長、6月、北海道大学第二体育館◇レスブリッジ大学夏期研修日本語指導（3人による指導）6月8日～20日◇出前講義「日本人の発想と日本語」、大麻高校、6月◇文化協議会役員交代式出席（第53代代表就任）、11月◇中国東北部研究視察旅行（北京市中国社会科学院近代史研究所、黒龍江省社会科学院、731部隊罪証陳列館ほか訪問）3月11日～18日◇中国の大学訪問、学術・国際交流（深圳大学、山東大学、大連理工大学、大連民族学院、東北大学東軟情報学院）、9月8日～15日

大石 和久 日本映画学会、第3回全国大会、12月1日、第3セッション司会

編 集 後 記

ゼミの様子、ブロック研修の様子、ともに生き生きと伝わってきて、編集段階でも楽しませていただきました。また「別れの言葉」では、英米文化学科と学生にたいする愛情のこもった激励の言葉もいただき、今後の励みになるものと思います。 (井上真蔵)

今年度で、大瀧徹也先生、野坂幸弘先生、宝利尚一先生の三先生がご退職なさります。人文フォーラムにも、ご執筆していただいた先生方です。三先生には、個人的にも、大変お世話になりました。誌面を借りて、改めて感謝を申し上げます。有り難うございました。

(大石和久)

人文フォーラム28：2008年3月3日発行 編集人：井上 真蔵、大石 和久 発行人：追塩 千尋
発行：北海学園大学人文学部(札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161) 印刷：(株)アイワード



表紙 「使犬挽轆」；間宮林蔵口述・秦貞廉編『東韃圖記』坤（自筆、彩色、26.7×76cm、北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（1775〔安永4〕－1844〔天保15〕年）は江戸時代の有名な北日本探険測量家。常陸（現茨城県）の農民の子と生まれたが非凡な数学の才能が認められて、江戸幕府の地理学者村上島之丞の配下となる。1808（文化5）年幕命により樺太を樺太東海岸白主からウタライカまで見分。翌年（1809）西海岸を北上して北端に近いナニオまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵が文化5、6年の探険に基づいた樺太の島名、地勢、産物、樺太アイヌ、オロッコ、スメレンクルの風俗等について詳細に口述し、それを絵図師村上貞助（村上島之丞の養子）が編纂したものである。

「使犬挽轆」には犬が描かれているが、犬は轆（そり）を挽き日常の生活に大切なこととなっていた。一家で養ふところの犬は大抵五、六頭より十二頭ぐらいである。馴れた犬を連頭に置いて挽く。これを名付けて船頭犬と云う。交易、猟、など犬とともにの日々で家族の一員であった。※轆（そり）：シケニ。履板：夷名シト。杖：夷名カウリ。

北駕文庫には直筆本の『東韃圖記』 乾・坤の巻（乾：38丁、図版24枚、彩色、坤：29丁、図版38枚、彩色）2冊が所蔵されており、これは貴重本である。1855年出版された『北蝦夷図説』（1～4、4冊、木版）は、本書と同じ内容である。
（北駕文庫 吉田千萬 記）